

「五千人の給食」

ルカの福音書 9:7~17

1. ヘロデの御言葉

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:7 さて、領主ヘロデはこのすべての出来事を聞いて、ひどく当惑していた。ある人たちは、「ヨハネが死人の中からよみがえったのだ」と言い、

9:8 別の人たちは、「エリヤが現れたのだ」と言い、さらに別の人たちは、「昔の預言者の一人が生き返ったのだ」と言っていたからである。

9:9 ヘロデは言った。「ヨハネは私が首をはねた。このようなうわさがあるこの人は、いったいだれなのだろうか。」ヘロデはイエスに会ってみたいと思った。

前回お伝えしました、イエシュアから遣わされた十二人の弟子たちの旅、働きについて記されたその間に、この当時ガリラヤとペレヤの地域の領主であったヘロデ（ヘロデ大王の息子ヘロデ・アンティパス）についての記述が唐突に挟み込まれています。遣わされた十二人の働きとこのヘロデの言葉は、一見何のつながりもないように思えますが、たとえヘロデの言葉であったとしても、これも聖書に記されたれっきとした御言葉です。そうでなければこの上記の記述がここに存在するはずがありません。ヘロデが言った、正確には彼が「聞いて」そして語ったその内容はどれも、人が「死人の中からよみがえった」「生き返った」よみがえったという、人の復活が述べられているものです。十二人の弟子たちはイエシュアから遣わされて「神の国」の「福音」を宣べ伝え、癒しの御業を行いました。この時の弟子たちはまだイエシュアが十字架にかかれ、死んで後によみがえられることは聞いておらず、当然これを理解していませんでした。つまり彼らは人の復活については語っていなかったのです。

しかしここでヘロデが語った「死人の中からよみがえった」「生き返った」という話をあえて付け加える、挟み込むことで、十二人が宣べ伝えた「神の国」の「福音」のその内容を見事に補填し、これを補っているのです。つまり「神の国」とは死からよみがえった、神によみがえらされた者が入る御国であるということがここには示されているのです。ここでヘロデが挙げているヨハネや昔の預言者たちだけではなく、すべての人はやがて死にます。しかし、イエシュアが号令と御使いのかしらの声、神のラッパの響きとともに天から来られる時、私たちキリストにある死者はみなよみがえり、空中に、そして天に引き上げられます。あるいは「エリヤ」のように死を見ることなく、朽ちない身体に替えられる者もいるでしょう（Iテサロニケ 4:16~17）。このように、ヘロデの言葉には、いや主がヘロデを使って語らせたこの御言葉には、イエシュアの空中再臨による私たち教会の携挙の事実が、その時起こる復活の御業が、よみがえりの奥義が記されているのです。

ちなみに、ここでヘロデは「ひどく当惑していた」とありますが、これをヘブル語直訳では「靈(רוח)が騒ぐ(רוע)」と言い、この表現が旧約聖書で使われているのは、創世記 41:8 とダニエル書 2:1 のみ

で、その内容はなんとどちらも同じで、王がある夢を見たことによるもので、その夢はこれから後に起こる出来事、神のご計画を表したものでした。しかし王たちはその夢の意味が理解できず、この時のヘロデのように「ひどく当惑していた」、すなわち「霊(רוח)が騒ぐ(רעף)」という表現で記されているのです。つまりヘロデのこの心理状態、霊的状态は、これから後に起こる、必ず起こる神のご計画の、その絶対性、確実性を表しているのです。

イエシュアによる携拳も復活も、とうてい理解できるものではありません。しかしイエシュアはすでに十字架の死と三日目の復活、そして昇天によって、まさに身をもってその現実性、真実性を証明してくださいました。神を信じる、イエシュアを信じるとはこの事実を信じ、そしてやがて同じことが自分自身の身に起こることを信じることなのです。そしてこの時のヘロデの思い以上に「イエスに会ってみたい」イエシュアに会いたい、引き上げて下さいと願う者となることが最も重要なことであると信じます。

ちなみに、この「ヘロデ(הֶרֹדֵס)」という名をヘブル語で表記すると、そこにはヤーラド(רָאֵד)「神が天から降りて来られる(創世記 11:5)」という意味の言葉が隠されており、ここでイエシュアが天からまさにヤーラド、降りて来られ、携拳と復活を成就されるという神のご計画の奥義を語られた彼の名がヘロデであったことも決して偶然ではないということがわかります。このように、聖書の記述はすべて、誰が語り、誰が行った事であれ、すべてが神、主によって記された御言葉であり、そしてそこにはやがて必ず起こる神のご計画が指し示されている、奥義として秘められているのです。

2. ベツサイダ

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:10 さて、使徒たちは帰って来て、自分たちがしたことをすべて報告した。それからイエスは彼らを連れて、ベツサイダという町へひそかに退かれた。

9:11 ところが、それを知った群衆がイエスの後について来た。イエスは彼らを喜んで迎え、神の国のことを話し、また、癒やしを必要とする人たちを治された。

イエシュアが遣わされた十二人がみもとに帰って来ました。遣わされる前はただの「十二人」でしたがここでは「使徒たち」と呼び名が変わっています。彼らが忠実にその役目を果たした証しです。イエシュアはそんな彼らを少し休ませようとされたのか、彼らを連れてベツサイダという町へ「退かれた」とあります。しかしそこにも群衆がついて来たという出来事が記されています。ここにもやはり神のご計画の「型」があるのです。結論からして、先ほどのヘロデについての記述に秘められた携拳と復活の奥義に続いて、やはりここにもそれに付随し、補う内容が記されています。まず使徒たちが役目を終えてイエシュアのみもとに帰り、イエシュアは彼らをひそかに連れて行かれる、というこの様子、状況だけを見てもこれが携拳の「型」たえであることは明白です。

さらにベツサイダ(בֵּית צִיְדָה)「漁師の家」という名前について、ツァイド(צִיד)「漁師、狩人」という言葉が使われており、これは本来、以下のような存在を指した言葉です。

創世記【新改訳 2017】

10:8 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の勇士となった。

10:9 彼は【主】の前に力ある狩人であった。それゆえ、「【主】の前に力ある狩人ニムロデのように」と言われるようになった。

このように、ツァイドとは本来、「【主】の前に力ある狩人」という意味があるのです。ニムロデは神に敵対する権力者、権威者、王となりましたが、その力はもともと主がお与えになったものです。私たち教会も以前は、いや実は今も、彼のように神に背く存在でした。しかし主はそのあわれみのゆえに、私たちを新しく造り変え、天に引き上げ、まさに主イエシュアの御前に座らせてくださいます。こう記されているとおりです。

エペソ人への手紙【新改訳 2017】

2:3 私たちもみな、不従順の子らの中であって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、

2:5 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。

2:6 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。

2:7 それは、キリスト・イエスにあって私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来たるべき世々に示すためでした。

「来たるべき世々に示すため」すなわちやがて来たる御国「神の国」において私たち教会は「キリスト・イエスにあって…ともによみがえらせ、ともに天上に座らせ」た存在として置かれる、住まわされるのです。これこそまさに主の御前に力ある存在、真のツァイドであり、その家である「神の国」はまさにベツサイダなのです。

またイエシュアは「ひそかに退かれた」ともありますが、ここに使われたスール(רוּל)という言葉は本来、「覆いを取り払う、取り外す」という意味の言葉で最初の言及は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

8:13 六百一年目の第一の月の一日に、水は地の上から干上がった。ノアが箱舟の覆いを取り払って眺めると、見よ、地の面は乾いていた。

ノアはスール「覆いを取り払って」そして「見よ、地の面は乾いていた」とあり、彼は大洪水という滅びが過ぎ去った後の新しい大地を見たのです。私たち教会はこのノアのように、携拳という箱舟に乗り、滅びを免れ、やがて地上に新しい世を、「神の国」を見ることになるのです。そのような者として神は、イエシュアは、私たち教会を「喜んで迎え」てくださる、という事実が、ここには示されているのです。

3. およそ五千人

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:12 日が傾き始めたので、十二人はみもとに来て言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、彼らは周りの村や里に行き、宿をとり、何か食べることができるでしょう。私たちは、このような寂しいところにいるのですから。」

9:13 すると、イエスは彼らに言われた。「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」彼らは言った。「私たちには五つのパンと二匹の魚しかありません。私たちが出かけて行って、この民全員のために食べ物を買うのでしょうか。」

9:14 というのは、男だけでおよそ五千人もいたからである。しかし、イエスは弟子たちに言われた。「人々を、五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい。」

9:15 弟子たちはそのとおりにして、全員を座らせた。

9:16 そこでイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げ、それらのゆえに神をほめたたえてそれを裂き、群衆に配るように弟子たちにお与えになった。

イエシュアが行われた奇蹟の中でも特に有名な「五千人の給食」の出来事が描かれています。これをヘブル語の最初の言及の視点で解き明かしてみたいと思います。聖書の中でこの「およそ五千人」という数、人数が最初に記されているのはヨシュア記 8:12 です。

ヨシュア記【新改訳 2017】

8:10 翌朝ヨシュアは早く起きて、兵を召集し、イスラエルの長老たちとともに、兵の先頭に立ってアイに上って行った。

8:11 彼とともにいた戦う民はみな、上って行った。彼らは町の前に近づき、アイの北側に陣を敷いた。彼とアイの間には谷があった。

8:12 彼は約五千人を取り、ベテルとアイの間、町の西側に伏兵として配置した。

…

8:28 ヨシュアはアイを焼き、永久に荒れ果てた丘とした。今日もそうである。

これはモーセの後を継ぎイスラエルの指導者となったヨシュアが、アイという町を攻め取った時のものです。そこで大いに活躍したのが「伏兵」すなわちひそかに配置された、隠された「約五千人」の兵士たちで、つまりこの「およそ五千人」という言葉、その存在には先ほどの「ひそかに退かれた」イエシュアと使徒たちの後について行った群衆に表されていたものと同様に、携拳され、この地上から隠される私たち教会の存在が表されているのです。そしてそれは「ベテルとアイの間」に配置されたとあります。「ベテル」は「神の家」という意味ですが「アイ(אֵי)」には「荒れ果てた丘」すなわち「廢墟(רָחֵב)」イー」という意味があるのです。私たち教会は「廢墟」と「神の家」の間に隠される存在です。どうぞ今、聖書の歴史観で私たちが置かれている場所、時を捉えてみてください。旧約聖書の時代にはあった、かつてのイスラエル王国、その象徴であるエルサレムの神殿は今どうなっていますか。それは一部の城壁を残すのみとなっており、これこそまさに「廢墟」なのです。しかしアモス書にこう預言されています。

アモス書【新改訳 2017】

9:11 その日、わたしは倒れているダビデの仮庵を起こす。その破れを繕い、その廃墟を起こし、昔の日のようにこれを建て直す。

9:12 これは、エドムの残りの者とわたしの名で呼ばれるすべての国々を、彼らが所有するためだ。——これを行う【主】のことは。

「**ダビデの仮庵を起こす**。」それは「神の国」を建てることと同義、同じ意味です。神のご計画は無から有を起こすことではなく、死からいのち、滅びから救い、まさに「廃墟」から「神の家」を起こすこと、よみがえらせることです。私たち教会は今その「廃墟」となっているイスラエルと、やがて「神の国」として建て直されるイスラエルの、その間の時代に置かれているのです。それがこの「**ベテルとアイの間…に伏兵として配置した**」「**約五千人**」という存在には表されており、イエシュアについて行った「**およそ五千人**」という群衆がやはり私たち教会が携拳されるという神のご計画を指し示していることの裏付けとなっています。

4. 五つのパンと二匹の魚

そしてイエシュアがこの「**およそ五千人**」にお与えになった「**五つのパンと二匹の魚**」。正確には十二人の使徒たちが持っていましたが、イエシュアの御手を通して与えられたそれらは、神の御言葉、聖書を表しており、正確にはタナフと呼ばれる「モーセ**五書**」、「預言書」、「諸書」からなる旧約聖書 39 巻全体を指し示しています。これをイエス・キリストとも呼ばれるイエシュア・ハマシアハを通して解き明かしたものが新約聖書 27 巻であり、新約はすべて旧約、タナフの土台の上に成り立っています。旧約聖書の御言葉はすべてイエシュアによって読み解かなければならず、それらはすべてイエシュアを指し示しているのです。正確にはイエシュアという御方がどのような御方で、何を成し、何を成し遂げられるのかという事実です。この視点で捉えて読まなければ、決して読み解けないのが「**五つのパンと二匹の魚**」にたとえられた旧約聖書です。今日でも多くのユダヤ人はイエシュアを神の御子、ダビデの子、イスラエルの主であるという真実から目が隠されています。私たちはその隠された御言葉の奥義をイエシュアから与えられ、やがてはこの地上からも引き上げられ、天に隠される存在となります。それを表すように、イエシュアは「**五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げ、それらのゆえに神をほめたたえてそれを裂き**」ました。イエシュアは「**天を見上げ**」、これを「**取り**」そして「**裂き**」ました。「裂く、分ける、別れる」という意味のパーラス(**פָּרַד**)は本来、聖なること、聖別、きよめ分かたれることを意味する言葉です(レビ記 11:3)。イエシュアはまさに私たち教会を聖なるもの、ご自分のものとして選び分けられ、そして「**天を見上げ**」、天に置かれる者として、地にある者たちからまさにパーラス「完全に分ける(レビ記 11:3)」ために携拳してくださるのです。

5. 五十人

またイエシュアは「**人々を、五十人ぐらいつ組にして座らせ**」られました。「**五十人**」というこの数には本来、滅びを免れる「正しい者たち」という意味があります。

創世記【新改訳 2017】

18:22 その人たちは、そこからソドムの方へ進んで行った。アブラハムは、まだ【主】の前に立っていた。

18:23 アブラハムは近づいて言った。「あなたは本当に、正しい者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか。」

18:24 もしかすると、その町の中に正しい者が五十人いるかもしれません。あなたは本当に彼らを滅ぼし尽くされるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにならないのですか。

18:26 【主】は言われた。「もしソドムで、わたしが正しい者を五十人、町の中に見つけたら、その人たちのゆえにその町のすべてを赦そう。」

このように「五十人」とは「その町のすべてを赦そう」とまで言わしめるほどの神の目に「正しい者」を指すのです。ソドムにはこの「五十人の正しい者」はいませんでした。それゆえ滅ぼされました。同様に、世の終わりの大患難の時に、私たち教会は携挙されており、この地上にはいません。私たちはそのような者となり、「神の国」に「座らせ」る、住まわせる者となるように神に選ばれている事実がこの数には秘められているのです

4. 余ったパン切れ

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:17 人々はみな、食べて満腹した。そして余ったパン切れを集めると、十二かごであった。

およそ五千人の「人々はみな、食べて満腹した。」とあります。「満ち足りる」という意味のサーヴァ(צָרַף)は本来、このような意味で用いられました。

創世記【新改訳 2017】

25:8 アブラハムは幸せな晩年を過ごし、年老いて満ち足り、息絶えて死んだ。そして自分の民に加えられた。

このように、サーヴァとは本来、死んで後、「自分の民に加えられ」ることを意味する言葉なのです。私たちが加えられる民とは何でしょう。日本人ではありません。それはもちろんアブラハムの子孫、イスラエルの民です。この「余ったパン切れを集めると、十二かごであった」とは彼らを指し示したものです。世の終わりの大患難を生き延び、やがて地上に再臨されるイエシュアによって呼び集められる、イスラエルの残りの者と呼ばれる彼らとともに、まさにこの「民に加えられ」、私たちは「神の国」に入り、一つの民とされるのです。

5. 寂しいところ

これらの出来事はベツサイダの「寂しいところ」で起こりました。ここにはシャーマム(דָּמָם)という言葉が使われており、それは本来、大飢饉のような大きな災害によって「荒廃した、荒れすたれた土地

(創世記 47:19)」という意味を持つ言葉です。イエシュアご自身が預言されたように、やがてこの地上に「世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難 (マタイ 24:21)」という災い、大患難が起こります。しかし私たち教会は、イエシュアが天を見上げ、パンを裂いてくださったように、この地上からきよめ分かたれ、パラス、完全に分けられる者として天に携挙されます。そしてイエシュアが地上再臨されるその時には、ともに地上に帰って来て、大患難を潜り抜け、イエシュアによって救い出されたイスラエルの残りの者ととともに「神の国」に住まう一つの民とされるのです。このような神のご計画が、「神の国の福音」が、この「五千人の給食」の奇蹟には表されている、奥義として秘められているのです。

6. 目標

最後に、パウロがこの預言の御言葉をもって互いに励まし合いなさいと教えた以下の御言葉を一緒に読んで終わりたいと思います。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

私たち教会にとってこの御言葉、この預言、この約束以上の励ましはありません。ただ耳障りの良いだけの口先だけの励まし、慰めの言葉など聞く必要はありません。私たちはこの携挙の約束だけを胸に刻みつけて、その日、その時を待ち望み、目指しながら今を生きれば良いのです。その証拠に、今日の箇所のように、聖書のいたるところにこの奥義が存在します。その一つひとつを掘り起こし、つまびらかに解き明かし、奥義であるただこの一事を、何度も何度も繰り返し繰り返し語り続ける、それが今を生きる私たち教会の使命です。

ピリピ人への手紙【新改訳 2017】

3:13 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えることはありません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、

3:14 キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。

これからもともに走り続けましょう。「神が上に召してくださる」引き上げてくださる、というその賞を、その目標を目指して。